2022 文化で滋賀を元気に！賞

大賞　画伯の遺言を今に活かし未来に繋ぐ活動文化賞

末富孝也さん（企画舎 羅針盤 代表）／大津市

（受賞者・団体／主な活動地域 以下同じ）

［講評］

由緒ある文化財を後世にいかにして残すか、これは現在に生きる我々に課せられた難しい使命である。郷土の巨匠 山元春挙画伯の思いを遺言と捉え、蘆花浅水荘を積極的に活用しながら保存に努める末富孝也さんの姿勢を評価したい。「蘆花浅水荘活性化推進委員会」や「春縁会」を創設し、地元と連携するなど同じ志を持つ人たちを見つけ、巻き込み、活動の幅を広げているのも素晴らしい。

公共工事を請け負う建設会社の社員だった末富さんは「最初は無理と言われた企画も行政側と何度も協議、協力して解決し進めてきました」と言い、そんな経験が今の活動に生かされている。文化財の保全と活用を両立させることについての課題も多い。例えば蘆花浅水荘の場合、多くの見学者を受け入れたいのにトイレが1か所しかなく、ようやく増設の許可に至ったが手続きは大仕事だった。文化財施設にはバリアフリー設計が難しいケースも少なくない。

近くには膳所藩主、本多氏ゆかりの本多神社や膳所焼の歴史を伝える膳所焼美術館もある。蘆花浅水荘にとどまらず、３つの素晴らしい庭園を巡るツアーも計画中で、数々の文化財と連携しながら膳所の魅力を伝えていきたいと末富さんは夢を膨らませる。

重要文化財 蘆花浅水荘の建物の持つ価値以上の新たな付加価値創造への可能性を広げ、膳所のみならず、大津、滋賀になくてはならない文化発信の拠点としてますます発展するよう、末富さんには今後次世代育成にも力を注いでいただくことを祈念して賞を贈る。

受賞者について

末富孝也さんは、新しいまちづくりを目指す活動団体「企画舎 羅針盤」代表で「浜大津こだわり朝市」開催の仕掛け人。そして今、膳所の湖岸にある国の重要文化財「蘆花浅水荘（ろかせんすいそう）」の案内人を務め、知る人ぞ知る隠れた名所を地元の活性化へつなげようと奮闘、入場者が増えるなど成果が見え始めている。

蘆花浅水荘は、明治から昭和初期に京都画壇で活躍した大津市生まれの日本画家・山元春挙が建てた別邸。大津市中庄の約1300平方メートルの敷地に本屋（母屋）と記恩堂、庭園などが残っており、孫の寛昭さんが引き継いでいる。末富さんは高校の先輩の寛昭さんからの依頼で管理・運営を手伝うことに。

「この建物を美術工芸家その他の人々の集会場に」という春挙の希望を継いで守り続けるために積極的に活用していこうと、末富さんらが編成した「蘆花浅水荘活性化推進委員会」や、春挙と縁があると思う人が集まった「春縁会」があり、合わせると約40人。同委員会や春縁会の人たちと一緒になって、庭や施設の修繕や清掃活動、施設紹介のパンフレット作りを手掛けた。同時に会場を利用した講演会やコンサート、展覧会、お茶会などで積極的に活用し地域の活性化に光を当てている。

昨年開かれた春挙の生誕150年を記念した県立美術館と大津市歴史博物館の展覧会では蘆花浅水荘のパンフレットを設置し、会期中は予約なしで誰でも入場できるPRも。パンフレット作戦が功を奏し、例年年間1000人のところが2700人もの来場者にもなった。

「放置しておくと朽ちていく文化財にも生きる道はあります。同じ環境にある他の文化財運営のモデルケースになれるようになれば」と、末富さん。先人が遺した資産を未来に届けようと意欲を見せている。

表彰概要

■表彰の種類　（1）各賞　文化で滋賀を明るく元気にし、活力あふれる地域社会の実現に貢献している団体または個人（若干名）
（2）大賞　（1）の受賞候補のうち最も評価された団体または個人（1名）
（3）各賞の名称は、推薦者からの提案に基づき決定

■表　彰　式　令和５年２月25日（土）14:00～　びわ湖ホール小ホール　※受賞者には賞状と賞金（大賞10万円、各賞５万円）を贈呈。

■募 集 期 間　令和４年８月１日（月）～10月31日（月）

■候　補　者　募集期間内に推薦書を文化･経済フォーラム滋賀に提出。自薦、他薦は問わない。

■選　　考　令和４年12月８日（木）　選考委員会で審査を行い、大賞･各賞を選考。

選考委員　秋村 洋［㈱プラネットリビング代表取締役］、髙梨 純次［（公財）秀明文化財団理事］、
西堀 武［㈱しがぎん経済文化センター取締役社長］、南 千勢子［ピアニスト］、
山本 勝義［㈱ビルディング・コンサルタントワイズ代表取締役］

子どもたちに感動体験を贈る文化賞

あしながほほえみプロジェクト 会長 伊藤 宏太郎さん／長浜市

コンサートや演劇の観賞や郷土の自然体験を通じ、その場でしか味わえない息吹を感じる、そんな「感動体験」の機会を長浜市の子どもたちに無償でプレゼントする「あしながほほえみプロジェクト」は、地域の文化芸術振興としてぜひ注目したい取り組みである。趣旨に賛同した地元企業や個人からの寄付で、子どもたちに贈られるチケットや体験費用を賄う仕組みに40の団体などが協賛し、2022年度は440人の子どもたちが参加した。

「あしながほほえみプロジェクト」は、子どもたちに豊かな感性を育んでもらい、彼らが地元の将来の発展を生み出す原動力になって欲しいと2016年に発足した。市教委や行政の協力も得て、市内の小中学生を対象にした事業募集チラシの全学校への配布や、活動を紹介した「あしなが通信」を学校やまちづくりセンター、図書館などに設置して、同プロジェクトを知ってもらう地道な活動を続けた。今ではホームページでも告知、募集を始め、小中学生のいる家庭ならみんなが楽しみにしている身近な地域プロジェクトへと成長している。

今年度から、野菜を収穫して調理する農業体験や、ロボットを動かすプログラミング教室などに事業内容を広げ、更に子どもたちの社会性や好奇心を高めようと展開している。「地域みんなで子どもたちの成長を育み、それを感じて、成長した子どもたちが地元に関わってくれるきっかけになればうれしいです」と、同理事会副会長の前川和彦さんは活動に思いを込める。

地元の企業や住民の寄付で運営されていることに大きな意義がある。文化と経済の連携をコーディネートし、次世代を担う子どもたちの郷土愛を育む先進事例として評価に値する。

百名山伊吹山の花を救おう文化賞

伊吹山もりびとの会 会長 西澤 一弘さん／米原市

市民環境保全グループ「伊吹山もりびとの会」の長年にわたる意欲的な自然保護活動が高く評価された。

伊吹山は1300種以上の野草、薬草が自生、山頂一帯では天然記念物にも指定されている。その貴重な自然を守り、保全活動に取り組もうと2007年に発足したのが「伊吹山もりびとの会」だ。1989年から続けられていた花のボランティアガイド「滋賀自然観察指導者連絡会彦根支部（伊吹山自然観察会グループ）」のメンバーがイノシシやシカなどからの獣害被害や西洋タンポポなどの外来種の増加に気づき、保全活動の必要性を認識、独立した活動組織として立ち上げた。

伊吹山を愛する県外からの人も参加、現在メンバーは20~80歳代の男女約60人。登山道の整備や補修をはじめ、山頂付近の「お花畑」では貴重な植物を獣害から守る保護柵の設置、外来種植物の駆除のほか、花の観察会や現地ガイドなど活動は幅広い。地元の小中学校の学習登山の引率や、シモツケソウやイブキトラノオなど山頂付近で観察できる季節ごとの花や薬草などをメンバーによる写真やイラスト入りで解説したガイドブック「伊吹山お花畑植物ガイド」の販売なども好評だ。

会長の西澤一弘さんは「伊吹山は、他の山では見ることが難しい貴重な動植物が観察できることも魅力の一つです」と話す。県外からのリピーターも多い。

現地での保全活動は重労働で肉体的、経済的負担と危険をも伴う。しかし、今や同会の意欲的できめ細かい取り組みは、美しい自然のみならず歴史的にも重要で滋賀の文化を表する伊吹山を、次世代へ引き継ぐためになくてはならないものとなっている。これからの活動にも期待したい。

猫とアートで地域を繋ぐ文化賞

一般社団法人コニャンナーレ 代表理事 中森 健さん／湖南市

東海道の宿場町として栄えた湖南市石部で猫好きの芸術家グループによるユニークなまちづくり活動で地域の活性化や文化の創造に寄与する新しい試みである。

グループは2020年に3人の芸術家が立ち上げたアートプロジェクト「コニャンナーレ」実行委員会で、人と動物が健康的に暮らし、地域に寄り添いながら地球規模の視野でも活動するグローカルなコミュニティを目指している。

「ネコ」、「フード」など身近なキーワードを足がかりにアートで人と動物や外国人との共生、街道文化を発信している。滋賀県が募っていた各地域の自然や文化といった美の資源を活用した取り組み「『滋賀をみんなの美術館に』プロジェクト」にも採択された。

そのプロジェクトの取組みの一つが地元の祭を盛り上げる手法として、青森県の「弘前ねぷたまつり」に着目し、灯「ねこねぷた」作りの体験教室を開催。交流のあった守山宿や東近江市のブラジル人学校でも教室を催した。2021年は新型コロナウイルスの影響もあり、祭は中止になったが、会場を屋内のホールに変更して色彩豊かな手作りの灯約230個が披露された。

代表理事の中森健さんは「私たちの試みや技術が他の地域に伝わり、共有されることで多様性が広がります。伝わった地域で新しい価値の発見や豊かな生活になる「『トランスローカル』へと発展してくれれば」と、期待する。また、活動自体を収益のある持続できる組織にしようと2022年に「一般社団法人コニャンナーレ」を新たに設立。2025年に開催される「大阪・関西万博」では関西へ訪れる様々な人との交流を滋賀にも広げたいと、多方面の分野から開催を応援する取り組み「TEAM EXPO 2025プログラム」にも積極的に参加していくという。

多様な価値観を尊重し合う、これからの日本社会のあり方とリンクしており、将来性にも期待し、これからの活動にエールを送りたい。